

「ゆとり」の中で 「生きる力」を

今、幼稚園を含む、小・中学校では、「ゆとり」の中で「生きる力」を課題に、時代の変化に対応した在り方の具体化にとりこんでいます。

日本の教育は、どちらかというのと飼犬タイプの教育でありました。野良犬的な個性や能力は敬遠され、集団の中で同じように行動することを美德とし、大人はこのような子どもに良い評価を与えていました。これからは、自分で獲物を捕ってくる能力の高い野良犬型の人間が、より高く評価される時代となります。激変する環境の中でどのように生きるか、自分の「生きる力」によってどれだけ人生を楽しめるかということなのです。

「生きる力」とは、具体的にどう考えれば良いのでしょうか。自ら考える力が「知」であり、豊かな人間性や思いやりが「徳」であり、たくましい体が「体」と古来教育について解かれてきた知徳体の教育が生きる力なのです。それ自体、なんの変わりもないのですが、衰退型の社会にはこれだけではインパクトに欠けるように思うのです。「ゆとり」がなく社会全体が自信をもった行動がとれなくなっているようです。

そんな重苦しい社会のなかで唯

一変わっていないのが、子どもたちの心です。純真だけれどヤンチャないたずらっ子、臆病だけれども新たな発見に感動する冒険家、以前と変わらぬ子どもたちの姿にとても勇気づけられます。

桜と学校はよく似合うと言われます。どの学校にも幼稚園にも、桜の木の本や二本は植えてあります。その花の下で、葉の下での出来事が、大人になってからの回想シーンのひとコマになっていくことが多くあります。しかし、大人感覚で桜を見るとき、桜は咲いています。桜は散ったのふたことで終わります。いや、桜を楽しむゆとりがあったでしょうか。

子どもの発想は豊かです

桜は春に 咲き

枝に 咲き

空間に 咲き

重力に 咲き

そして、

地面の水たまりに

咲く

ことばでは、それを表現する能力のない幼児でも、こうゆう発想で見て、多元的に多層的な思考や視点が確実に形成されています。

「生きる力」ということは、自ら考えて力をつけることで、自ら考え気づくことが大切です。ともすると、集団でとびぬけて気づく子に、集団を乱すと見られる傾向にあります。大人に指示されて気づくのでは、真剣さの度合いが異なる



つる子どもまつりにて

り、自ら気づいてこそ「なぜ？」と一日中も考え続けるのです。不可測で不思議な自然の存在は、生きる力をはぐくむ大切な環境です。

ゆとりには物理的ゆとりと精神的ゆとりがあります。忙しい合間のひと休み、高い天井は空間的ゆとりであり、精神的ゆとりとは「反省するゆとり」であるといわれます。どんなに忙しいときでも一時中断し、立ち止まって反省するゆとり。今、求められているのはこの反省するゆとりです。子どもは大人の背を見て育ちます。大人の模倣をしながら学びます。このように考えると、今や、日本中が立ち止まって反省するゆとりをもたなければならぬときです。気づいた時に反省するゆとりをもち、子どもたちに、その姿を見て学んでもらおうではありませんか。

ジュニアリーダー 研修会

日時 6月21日・22日
午後1時～翌日午後3時
会場 市営グリーンロッジ
内容 ・リーダー研修
・キャンプファイアー
・野外活動(軽登山)

対象 小学校5・6年生と中学校全学年
(都留市内育成会の小中学生)

参加費 1,000円

締切 6月16日

申込・問合先

社会教育課 生涯学習係

主催 市教育委員会

都留市育成会連合会

家庭・地域の教育力を 高めるフォーラム

日時 7月3日
午後1時30分

会場

富士女性センター大研修室
パネラー

「生きる力」を考える

「生きる力」とは

長谷川義高さん

(義務教育課指導主事)

「家庭の日」を考える

上細野自治会の実践

荻窪 久夫さん

(桜井小学校教頭)

「現代っ子気質」を考える

ガールスカウトの指導

佐藤 秀子さん

(主任児童委員)

コーディネーター

平井 幸成さん

(市教育相談員)

明治・大正期の 絵ばなし展

毎年恒例の、尾県郷土資料館春の特別展を開催します。

今年も、明治・大正に出版された絵ばなしを展示します。

広く知られている「かちかち山」や「花咲かじいさん」等の昔ばなしや、ポンチ絵と呼ばれた漫画を中心に、当時の多色刷りの絵と文をお楽しみください。

期 日 6月14日・15日
時 間 午前10時～午後4時
場 所 尾県郷土資料館
問合先

市教育委員会社会教育課
文化振興係